



茨城県地域臨床 教育センターだより

2024
Vol.47

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121 令和6年3月1日発行(第47号)

新年の挨拶 — 働き方改革に向けて —



教授・センター部長
鈴木 保之

専門領域 ■ 心臓血管外科

新年（令和6年）、明けましておめでとうございます。

この数年、コロナ禍の対応で今までの日常とは異なった様々な経験をしてきました。昨年、コロナ感染症が5類に分類され、感染も終息へ向かう中、医療を取り巻く環境も新たな方向へ進んでいくものと思われます。その中で、4月から始まる医師の働き方改革のさまざまな取り組みに少なからず不安を抱きながら迎える新しい年となりました。

私が専門とする心臓血管外科領域ではほとんどの医師が総合病院、大学病院の勤務医であり時間外・休日労働時間が制限されることになります。厚生労働省のホームページの手続きガイドを見ると以下の様な記載があります。

- ・十分な睡眠が取れずに連続して勤務する時間が長くなると、疲労が蓄積し、注意力の低下などによる医療ミスのリスクも高まる。
- ・勤務医が確実に休息を取ることができるよう、退勤から翌日の出勤までに原則9時間を空けるルール（勤務間インターバル制度）が始まる。
- ・また、1か月の時間外・休日労働が100時間以上となることが見込まれる場合は、産業医などによる面接指導を行う必要がある。

どれも当然のことですが、自分のこれまでの心臓血管外科医としての生活の中ではあり得なかったことで、心臓外科になりたての頃は1週間病院に泊まり込み、夜中の緊急手術が朝に終わってもそのまま連続勤務、月の時間外労働時

間が250時間になるということもしばしばありました。欧米と比べて集中治療室専属の医師（ICU医師）が少ない日本では、心臓手術後の術後管理を若手医師が行い、術後の管理をしっかりとできないものは手術もできないといった風潮がありました。確かに術後管理を行うことで、人工呼吸の設定や、補助循環、透析、薬剤の使用などの幅広い知識を得ることができ、また患者さんへの強い思いが形成されることはあるかと思います。ただ、心臓血管外科医としての手術スキルは術後管理では学べませんし、座学の学問では得られることはできません。

また欧米と比較して決定的に違うのは施設ごとの開心術の手術数です。手術成績は手術数が多い病院の方が良好であるとする報告は多数あり、若手心臓外科医が良好なトレーニングを受けるためにもそれ相応の手術数が必要であるという報告があります。確かに数だけが全てではなく、しっかりした指導体制のもとトレーニングを行うということが重要ですが、若手心臓外科医が執刀する手術が月に1～2例では良好なトレーニングと言えるか疑問があります。長年、小児の心臓手術に携わりましたが、新生時期の複雑な手術である完全大血管転移症に対する動脈スイッチ手術（ジャチーン）が助かって当たりまえの時代になりました。ただその疾患の頻度は少なく、小児開心術100に1例あるかどうかの数で、前任地でも年間数例程度しかなく、若手にその手技を執刀してもらうことは非常に難しいと感じていました。年間の総手術数が多ければ新生時期の手術も多くなり、若手心臓外科医も良好なトレーニングを受けることができるようになると思います。手術数が多くなれば、それ相応の心臓外科医・麻酔医の数、人工心肺技師の数、看護スタッフ、集中治療室（ICU）医師の数が必要となりますが、それらが良好なチームを形成することで、医師の働き方改革にも対応し、患者さんもレベルの高い治療を受けられることになり、心臓血管外科を目指す若手も良好なトレーニングが受けられることと思います。

今年一年、当センターにとってどのような年になるのか予測が難しいところではありますが、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

腫瘍内科医としての15年



筑波大学附属病院・
茨城県地域臨床教育センター
教授
副院長兼がんセンター長 兼
化学療法センター長

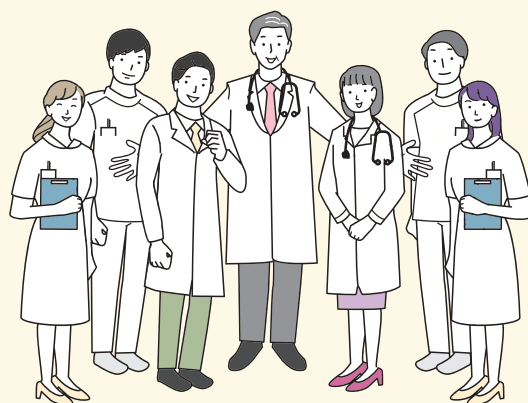
小島 寛

私が県立中央病院に赴任したのは2008年7月のことであり、以後15年8か月お世話になりました。2014年の4月には筑波大学附属病院・茨城県地域臨床教育センター教授を拝命し、直近10年間は大学教官として活動させて頂きました。2008年着任時には、当時の永井秀雄院長から化学療法センターの開設準備を命じられました。まだ化学療法が病院全体として体系的に管理されていない時代でしたので、三橋彰一先生やその後化学療法センターでいっしょに働くことになる看護師、薬剤師とコンセプトから診療手順に至るまで徹底的に議論しました。こうして化学療法センターは20床の外来治療施設として2018年12月8日にオープンしました。医師、看護師、薬剤師などのスタッフが連携してチームとして機能し、問診・採血から治療まで全ての過程をセンター内で完結できるようにした当時としては先進的な治療施設でしたので、他院の医師や看護師が見学に訪れたりしていました。患者数が年々増加し手狭になったため2013年には33床に増床し、現在では年間延べ8,000件以上の化学療法を提供しています。今日に至るまで、安全・安心ながん薬物療法を快適な環境で提供することを目指してやってきました。毎年センターが独自に実施している患者満足度の結果をみると、待ち時間の短縮だけは解決の難しい課題ですが、それ以外は概ね快適な環境下で治療を受けて頂いているものと判断しています。

もう一つ県中で私が手がけたことに、腫瘍内科の立ち上げがあります。私はもともと血液内科の専門医で、当院赴任前には筑波大学で造血器腫瘍の化学療法や造血幹細胞移植を担当していましたので、固形がんの診療はほとんど経験がありませんでした。当時は茨城県内で腫瘍内科を標榜

する病院はなく、三橋先生と2人で細々と腫瘍内科医として歩みだしましたが、2014年には石黒慎吾先生が、そして2018年には菅谷明德先生が腫瘍内科に加わり現在の4人体制になりました。県中では診療科間の垣根が低く、大学によくあるような臓器別の縦割り体制ではありませんので、多くの診療科の先生方や医療スタッフの皆さんと協力しながら気持ちよく働くことが出来ました。腫瘍内科では様々ながんの化学療法を担当するのみならず、化学療法安全管理、カンサー・ボードの運営、そして最近ではゲノム医療と多岐にわたる仕事を経験させて頂きました。また、原発不明癌、肉腫、希少癌の診断・治療はほとんどの県内がん診療拠点病院では困難ですので、自ずと集約化が進み県南、県北からの患者さんの紹介も少なくありません。県のがん診療連携拠点病院である県中で腫瘍内科の果たす役割は少なくはなく、次世代へと受け継がれていくことが重要です。幸い県中の内科専門研修プログラムに所属する専攻医3名が腫瘍内科を標榜しています。

県中の素晴らしいところは、様々な医療者が共通の目標に向かって一つになれるところだと思います。この「チーム県中」の伝統が今後も受け継がれ、患者さんを中心とした多職種連携の医療提供体制が維持されることを願っています。



筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学附属病院 茨城県地域臨床教育センター

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121
ホームページ <https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/chiiki/cyubyo/>



茨城県